

1型糖尿病 遠隔診療へ

神大病院研究 血糖測定器利用

コロナ禍ニース高まる

神戸大病院は2022年度から、全国14医療機関と連携し、1型糖尿病の遠隔診療に向けた研究に乗り出す。血糖値を下げるために患者が日々投与するインスリンの量などについて、血糖を自動で測定できる機器を利用し、どの医療機関からでも同じ基準で指導できる方法を構築する。研究グループは、遠隔でも、質の高い治療を提供できる仕組みをつくりたい」としている。

(諏訪智史)

インスリンの分泌が不十分な1型糖尿病患者は、食前など1日に最低4回、インスリンを注射や専用の機器で自ら投与し、血糖値を正常範囲内にコントロールする必要がある。

インスリンが不足すると、血液中の糖分を取り込めずじやせ細り、場合によっては高血糖に伴う意識障害

1型糖尿病は、インスリンを産生する膵臓の細胞が、免疫の異常などによって壊れる病気。国内に十数万人の患者がいるとされ、根本的な治療法はない。体質や生活習慣が合わさって発症する糖尿病は2型に分類される。

患者は食事内容などに応じ、適切なインスリンの量を投与しなければならず、医師や管理栄養士が定期的に指導している。ただ、指導がうまくいっていないかを調べるには、病院を受診して採血し、血糖の状態を示すヘモグロビンA1c(HbA1c)を調べる必要がある。遠隔診療だけで治療を続けるのは難しかった。

神戸大病院糖尿病・内分泌内科学の廣田勇士准教授

(48)は近年、腕や腹部にセンサーをつけるだけで、血糖を測定できる「持続血糖測定器」が普及してきた点に着目。機器に表示されたグラフを基に、適切なインスリンの量などを指導する遠隔診療を実現しようと、研究を計画した。

共同研究するのは、兵庫医科大学(四宮市)や国立病院機構梅京都医療センター(京都市)など14医療機関の専門医。機器を装着した

患者の血糖値を遠隔診療による指導で長時間、正常範囲内にコントロールできるか検証する。機器のグラフに基づいた指導は現在、医師の経験値などによって差が生じており、統一的な指導を確立させる狙いがある。

糖尿病患者は新型コロナウイルスの重症化リスクが高いとされ、通院時の感染を不安視する人も多い。患者からは「遠隔診療の仕組みがある」と心強い」と研究を歓迎する声が上がっており、患者らを支援するNPO法人「日本IDDMネット

トワーク」(佐賀県)も昨年12月、クラウドファンディングで集めた1000万円を研究助成金として贈っている。

廣田さんは「コロナ禍で、遠隔診療のニーズが高まっている。どこに任んでいても、安心して医療機関のサポートを受けられるようになりたい」と話している。

2022年3月28日
読売新聞